

読書案内 語学

- ①. 有坂秀世著『國語音韻史の研究増補新版』(三省堂, 昭和32年10月) ②. 同『上代音韻攷』(三省堂, 昭和30年7月) ③. 同『音韻論増補版』(三省堂, 昭和34年5月) ④. 同『語勢沿革研究』(三省堂, 昭和39年11月) ⑤. 有坂愛彦・慶谷壽信編『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』(三省堂, 平成元年6月)

中国語学で5冊の本を限定して示すことは、相当に難しい。そこで、私のたずさわる音韻史の分野にしほり、しかもこの分野の研究に大きな足跡を残した有坂秀世博士の業績を記すことにしたい。

①は、著者の歿後、増補されたもので、もとは『國語音韻史の研究』(明世堂, 昭和19年7月)として出された。これに対して、昭和27年5月、著者の亡くなった二ヶ月後に、学士院賞が授与された。國語音韻史の研究であるとともに、中国語音韻史の研究でもあるといわれる。なかでも、いわゆる重紐を解明した論文「カールグレン氏の拗音説を評す(一)~(四)」、陸法言『切韻』のよりどころを論じた「隋代の支那方言」が重要である。また、いわゆる上代の特殊仮名遣に関連する代表作として「國語にあらはれる一種の母音交替について」を挙げておきたい。これは大学卒業直後に書かれた。

②は、歿後刊行された遺稿であるが、大学卒業後二、三年のころに書かれた。上代日本語研究のため、中古音(Ancient Chinese)、上古音(Archaic Chinese)の全面的検討をおこなっている。上古音は、大矢透『周代古音考』にもとづきながら、それに修正を加えたものであるが、董同龢「上古音韵表稿」(『史語集刊』第18本所載)の推定音にきわめて近いといわれる。

③も、また歿後の増補であって、もとは『音韻論』(三省堂, 昭和15年12月)である。著者30歳の作、学位論文となった。「音韻(音素)」の定義は、今日では承認されないものの、言語の史的事実および音韻の変化に関する考察は、今日でも十分有用である。中国語に関するすぐれた論述が数多くみられる。

④も、歿後の刊行であるが、旧制高校時代の著述である。現代日本語諸方言のアクセントの比較から出発し、古代日本語における「母音交替の法則」「母音調和の法則」を想定した。これは、上代の特殊仮名遣を知らずに進められたものであったので、全面改訂する必要があったが、その改訂版が「國語にあらはれる一種の母音交替について」である。中国語に対する深い認識が随所にみられ、若いときから中国語を第二の研究対象としていた

の特殊仮名遣に関連しては、石塚龍磨^{つつまろ}著、正宗敦夫編纂校訂『假字遣 奥山路(上)』(日本古典全集刊行会、昭和4年5月)、『同(中)、(下)』(同、昭和4年9月)、草鹿砥宜^{くさかどのぶな}隆著『古言別音鈔』(勉誠社文庫、昭和53年12月)、橋本進吉著「國語假名遣研究史上の一発見—石塚龍磨の假名遣奥山路について—」(『帝國文學』大正6年11月号所載。橋本進吉博士著作集第三冊『文字及び假名遣の研究』所収、岩波書店、昭和24年11月)があり、また、大矢透著『周代古音考』(國定教科書共同販賣所、大正3年6月)、満田新造著『支那音韻斷』(大正4年10月著者発行、岡山。『中国音韻史論考』所収、武蔵野書院、昭和39年9月)も大きな影響を与えた。

一方、有坂博士が拗音説で先鞭をつけ、その重要さを示した朝鮮漢字音、ヴェトナム漢字音については、河野六郎著『朝鮮漢字音の研究』(『河野六郎著作集2』所収、平凡社、昭和54年11月)、三根谷徹著『越南漢字音の研究』(東洋文庫論叢第53、昭和47年3月)が後を継いだ。

『國語音韻史の研究増補新版』
國語音韻史の研究 目次

第 一 部

國語にあらはれたる「國」の音韻史について……………1

音韻史の研究の目的……………1

音韻史の研究の材料……………1

音韻史の研究の方法……………1

音韻史の研究の成果……………1

音韻史の研究の意義……………1

音韻史の研究の展望……………1

音韻史の研究の参考文献……………1

音韻史の研究の索引……………1

音韻史の研究の附録……………1

音韻史の研究のあとがき……………1

ことが了解される。

⑤は、生涯で一度だけ教壇に立ったときの講義録「國語學史」や書簡集を中心としたものである。國語学史とはいうものの、中国大陸、朝鮮半島との交渉を重視するもので、昭和14年の当時、早弥呼が登場する國語学史など他に類をみないであろう。

以上の5冊により、大学卒業後十年間ほどは闘病生活を送りながら、常人の及ばぬ功績を残し、その後十年間は寝たきりで無念の日々を送った有坂秀世の人と学問とを全体としてとらえることができよう。

もちろん、有坂博士の研究は、江戸時代以降の先人の業績の上にきずかれています。上代